

伝統文化における「雪月花」の美

——詩・歌と絵画から考える——

The Beauty of Setsu-getsu-ka in Japanese Traditional Culture:
An Approach for the Identity and Spirit in Poems and Pictures

彭 浩

要 旨

「雪月花」という言葉は、白居易の詩「雪月花の時に最も君を憶ふ」の影響を受け、日本で使うようになり、古典文学の世界だけではなく、現代人の生活に根付いていることに気づき、感動を覚えた。しかし、「雪月花」は、今は中国では使わない。今回は「雪月花」をモチーフにした日本の歌と絵画を通して日本人の自然観、美意識と心を考察し、また白居易の詩と比較して日本人と中国人の文学に対する考え方と美意識の違いを明らかにした。川端康成は『美しい日本の私』という講演のなかで、「雪月花の時、最も友を思ふ」というように使い、「友」の範囲を広め、人間・自然と美しい自然を見るときに人間の心まで含めた「友」にした。日本の文化は、「情」の文化といわれ、「もののあわれ」に代表されるように、自然の景色や文学作品に触れると、心に響いて感動することが多く、またそれを詩文や絵画に表している。「雪月花」を愛する心は「わび・さび」と同じく、禅の心に通じている。中国の文化は「意」の文化といわれ、儒教の影響が強く、文学が政治的な理想や倫理道徳を表現することが多く、風花雪月よりはもっと重みのある理性的な詩文や地道な生き方を求めるように思われる。

物質文明が中心になっている時代に、人間は心の感動を忘れてるように思われる。現代人は疲れた心を癒す必要があるかもしれない。自然のなかで生かされている人類にとって、もう一度原点に戻り、謙虚に自然と人間、人間と人間の関係を考え直さなければならない時期が来ていると思われる。自然を愛し、すべての生命を愛し、雪月花の美しさを感じる心を忘れないようにしたい。

キーワード

雪月花、自然観、もののあわれ、禅、心

1. はじめに

花には命がある。人はその命の美と力をいただいて心と暮らしを豊かにしている。人は花が好き、花を愛し、花を人生において大切な行事や普段の日常生活のなかに取り入れ、常に一番親しい友にしている。花は人生において欠かせないものになっている。

岡倉天心は『茶の本』第六章「花」のなかで、花と人間の密接な関係について述べた。「喜びにつけ悲しみにつけ、花はわれわれの不断の友である。われわれは花とともに食べ、飲み、歌い、踊り、恋にたわむれる。花を飾って結婚式を挙げ、洗礼式をおこなう。花がなくては死ぬこともできない。われわれは、百合の花とともに礼拝し、蓮の花とともに黙想に耽り、……どうして花がなくていきられようか」¹⁾。この世に花がなければどう生きるのかもわからないくらい、花が私たちの生活と密接な関係があると知っている。赤ちゃんが生まれたとき、花で迎えられ、入学式、卒業式、結婚式も花がなければ成り立たない。人生の終わりも、花に囲まれてあの世に逝く。

大切な花は、われわれの人生においてどのような意味をもっているのだろうか。筆者が師事した茶道裏千家の師匠松村宗喜先生は『そこに心あるならば』という本の「“花”ある生涯を」という節に、花について次のように語った。

「我が生涯に“花”を添えたいと思わない人はいないと思います。では、その花とは何でしょう。私は、心の動き、すなわち感度だと思えます。つねに感度を磨き、実践に移して、感動すること。何に出会ってもキャッチできる心の感度がなくては困ります。」²⁾

また、「桜の頃のおもてなし」という節において、桜どきのお茶会の話語った。

「廊下づたいに運び出された真塗の黒いお膳の上に、花びらが一枚、のっていました。見つけたお客が、『まあ、私のお膳に』と大喜びしますと、連客が『さっき運ぶ途中、そよ風にのった花びらが落ちたのでしょう。貴女だけ幸せなこと』と羨ましがり、吉野山から嵐山に桜の話もはずんで楽しいと催しとなったそうです。」³⁾

お運びの途中に花びらがひらひらと自然にお膳に落ちて、人はそれを見て心が躍り、感動する。すべてが自然のまま、人間が自然と一体になって美しい和やかな風情の世界を醸し出せば、いい思い出になるのである。その自然が与えてくれた喜びをさりげなく自分の生活に取り入れたら、心も生活も豊かになる。「ご家庭では春らしい器を使ってさりと一膳をおだしできれば、最高のおもてなしになるでしょう。……たとえ小鯛の笹漬け二枚しかなくても、小さなワイングラスにでも盛りつけて菜の花を添えれば、可愛いおもてなしになります。」⁴⁾

人は誰でも自然のなかの花を楽しみたい心をもっている。花は感動する心を教えてくれている。その花をもっと身近に持ってきて食卓、書斎、床の間に飾りたい気持ちが生まれる。その花の形を整えて「型」をきめて飾るのは、いけばなの始まりだといわれる。

中国と日本では、古来花を観賞する習慣がある。花だけではなく、雪と月にも特別な思いをもっている。中国と日本の文人たちは、花を語るとき、よく雪と月とあわせて考えて、「雪月花」という言葉が生まれた。さらに日本では、歌だけではなく、絵画、いけばな、茶道など伝統文化の世界では、雪月花は、モチーフとしてよく使われている。また、優れた雪月花の景勝をもつ有名な日本庭園三名園と日本三景がある。日本三名園とは、金沢の兼六園（雪）、岡山市の後樂園（月）と水戸市の偕楽園（梅）の総称であり、日本三景は、京都の天橋立（雪）、宮城県の松島（月）と広島県の厳島神社（花紅葉を花に見立てる）を指している。

1913年に設立され今日まで人気のある女性だけでレビュー・音楽劇とミュージカルを演ずる宝塚歌劇団は、花・月・雪・星・宙（そら）の五組から構成され、そのうちの三つは雪月花である。

2019年2月20日から25日まで5日間、日本の花道池坊流派の東京生成会の記念花展「いけばなの根源 池坊2019はな生成——雪月花——」が、銀座三越で開催された。花展の案内はテーマの「雪月花」について、次のように説明している。

「音もなく降る雪
いつしか大地は白くおおわれ
すべてが純白の世界とかわる
それは生成のはじまり
大地にねむる種は
やがてゆっくりと力強く天上へと向う
新しい生命の誕生
花は陽の光にはずみ
葉は月の光に輝く
花は美しい そしていとおいしい」

空から静かに降ってくる雪が純白の世界をつくり、新しい生命をもたらして愛おしい花は、月の光で輝く樹の葉に添えられて美しく咲いている。新しい命と美の世界は、「いのち」が動き出す千利休の積極的な「わび」と通じるように思われる。

会場に入って左側には、座敷飾り一式の三具足^{みつぐそく}の花を飾っている。天に向かって常磐木を立て神に降りてきていただくという日本古来の信仰から始まったお供えの木や花に基づいた床の間飾りの花であり、しん（本木）とそえ草（下草）から成る「立て花」で、今日の華道の基礎となる構成の花型である。神仏を敬い、飾る心を古人と同じく素直に表現した素晴らし

い作品である。いけばなの原型ともいえるこの花飾りは、筆者の茶道の先輩・池坊いけばなの先生今井以紅の作品である。

開催期間内に四百瓶を超えた作品は、雪・月・花という三つのテーマに分けて展示した。池坊の先生方の作品だけではなく、若い世代の作品も少なくない。「雪月花」の美しい情緒はいけばなを通して慎み深く表現されている。

中国唐代の詩人白居易（楽天）（772～846年）は「琴詩酒友皆抛我 雪月花時最憶君」と詩に詠んだ。日本の『和漢朗詠集』に「琴詩酒の友皆我を抛つ 雪月花の時に最も君を憶ふ」として収録された。白居易の詩は平安時代に愛され、その後の日本文学と伝統文化に大きな影響を及ぼした。「雪月花」という言葉は、白居易の詩の影響を受けて使うようになったと思われている。日本では、「雪月花」は、古典文学の世界だけではなく、現代人の生活に根付いていることに気づき、感動を覚えた。しかし、「雪月花」という言葉は、今は中国では使わない。何故なのか。この疑問をもって「雪月花」の世界を窺ってみたい。

今まで、日本の伝統文化の美と日本人の精神世界を探求して「わび・さび」「幽玄」「風流」などについて考えてきたが、今回はその続きとして、日本と中国の文学に表れた「雪月花」の情緒と美意識の相違を比較し、また、その美意識の具現化としての歌と絵画を通して日本人の心を探ってみたい。

2. 雪月花の定義

白居易の「雪月花時最憶君」は日本ではよく知られ、しばしば引用される。「雪月花」という言葉は、今日でも様々な場面で使われ、高雅な文化的な分野だけではなく、ふだんの暮らしのなかまで浸透している。どの辞書を調べても、「雪月花」の項がある。しかし、中国では、「雪月花」とい

う言葉がない。どの辞書を調べても「雪月花」は一つの言葉として載っていない。似たような言葉として「風花雪月」はあるが、「雪月花」とはニュアンスや使い方が異なる。どちらかというところ「花鳥風月」のニュアンスに似ているかもしれない。では、まず「雪月花」「風花雪月」「花鳥風月」という三つの言葉について辞書を調べて、雪月花の定義を確かめたい。

2-1. 雪 月 花

「雪月花」(せつげっか、せつげつか)については、『広辞苑』(第7版)では、次のように説明している。雪と月と花。四季おりおりの好いながめ。つきゆきはな。和漢朗詠集「琴詩酒の友皆我を抛(なげう)つ 一の時に最も君を憶(おも)ふ」。白居易の詩を付して四季おりおりの景色を見るときに最も君を想う心を説明した。

『日本国語大辞典』の「雪月花」の説明は次のようになっている。〔名〕(「せつげっか」とも)雪と月と花。また、特に四季の自然美の代表的なものとしての冬の雪、秋の月、春の花。四季の自然美の総称として用いる語。
*和漢朗詠(1018年頃)下「琴詩酒の友皆我を抛つ 雪月花の時に最も君を憶ふ」〈白居易〉。

『日本国語大辞典』は、『広辞苑』と同じく、四季の自然美とともに白居易の詩を付けて説明して、美しい自然の景色を見るとき、一番親しい人を想う心を表している。「雪月花」は白居易の詩と密接な関係がある言葉だという印象を受ける。

『デジタル大辞泉』は、白居易の詩を引用しない。「雪月花」の項では、茶の湯の七事式の花月の点前の内容を付けて次のように説明している。①雪と月と花。四季の自然美の代表的なものとしての冬の雪、秋の月、春の花。四季おりおりの風雅な眺め。つきゆきはな。②茶の湯で、一座七、八人が雪・月・花の札をひき、雪に当たった人が菓子を食べ、月の人が茶を

飲み、花の人が点前を行うもの。裏千家の玄々斎が七事式の追加として考案した。

「雪月花」は、白居易の詩の影響を受け、日本の言葉になっている。しかし、中国語の辞書には、「雪月花」が載っていない。つまり、中国語の言葉ではない。中国語の表現として、ニュアンスが近い言葉として「風花雪月」がある。続いて中国語の辞書で「風花雪月」を調べ、「雪月花」と比較して、二つの言葉の意味と使い方を辞書で確かめたい。

2-2. 風花雪月

中国では、「雪月花」という言葉は白居易の詩の他は、ほぼみられない。そのかわり、「風花雪月」がよく使われる。日本の辞書には「風花雪月」が載っていない。では、中国の辞書で「風花雪月」の意味について調べてみよう。

『辞海』の「風花雪月」の項では、次のように説明している。①泛指四时景色。无名氏《鱼篮记》第一折：“春夏秋冬四季天，风花雪月紧相连。”亦用以指浮泛的诗文题材。蠡勺居士《〈听夕闲谈〉小叙》：“使徒作风花雪月之词，记儿女缠绵之事。”②指男女情爱。乔吉《金钱记》第三折：“卓文君”，秦弄玉……本是些风花雪月，都做了筇杖徒流。”亦指花天酒地，不务正业的放浪行为。《初刻拍案惊奇》卷十五：“光阴如隙驹，陈秀才风花雪月了七八年，将家私弄得干净快了”⁵⁾。

風花雪月は、春夏秋冬の四季の景色を表し、または浅薄な詩文の題材を指している。もう一つの意味は、男女の情愛、または酒色におぼれて真面目な職業に従事しないことを指している。「雪月花」に「風」が入り、四季に合わせて四つの文字になっている。中国では、四字熟語が好まれるせいであろうか。

『現代漢語詞典』では、「風花雪月」について、次のように定義してい

る。原指古典文学里描写自然景物的四种对象,后来转喻堆砌词藻,内容贫乏,反映没落阶级情调的诗文⁶⁾。元々は、古典文学における四季の自然景色の描写を指していたが、後に美辞麗句を並べたてるだけで、内容が乏しいことを比喩する。

日本東京堂出版の『中国故事成語大辞典』「風花雪月」の項では、次のように説明している。意味：風と花と雪と月。四季折々に接する自然の優れた景色の意。のちに、内容が乏しく風景を写すだけの詩文を指す。また、男女間の恋愛や女性におぼれた生活を指す。出典：「雪風花月好，中夜便招延＝雪風花月好ければ，中夜に便ち招宴す。」(唐・鄭容「府中寓止寄大諫」)類句：雪月風花 風雲月露⁷⁾。

『中日辞典』(小学館)の説明によると、「風花雪月」の意味は、①美辞麗句を並べただけで中身がない(こと)。②男女の色恋。

ここまでみてきたように、「風花雪月」は、美しい四季の景色を表している。この意味は、日本語の「雪月花」と同じであるが、どの辞書も白居易の詩を引用していない。即ち、美しい景色を見て大切な人を想うような心境を表していないということである。また「風花雪月」には、「雪月花」にはない、美辞麗句を並べたてるだけで内容が乏しい比喩や男女の情愛におぼれてふしだらな生き方というマイナスの意味が含まれていることが大きな違いかもしれない。

参考までに、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』の説明を付けておく。風花雪月とは、自然の美しい風景や、そこから生じる情緒情趣を意味する中国語。日本語の花鳥風月に相当する。また、これから派生して以下のような意味でも使われる。なお、中国語では、日本の花鳥風月とは違い「美辞麗句にすぎないものごと」といった負のニュアンスを帯びる場合がある⁸⁾。

では、続いて「花鳥風月」について辞書で確かめたい。

2-3. 花鳥風月

『広辞苑』（第7版）では、「花鳥風月」についての説明は次の通りである。

①天地自然の美しい景色。②風流な遊び。

『日本国語大辞典』（精選版）では、「花鳥風月」について次のように説明している。『名』自然の美しい風物。また、それを観賞したり、材料にして詩歌などを創作したりする風雅の遊び。＊風姿花伝（1400～1402年頃）二「源平などの名のある人の事を花鳥風月に作り寄せて」。

『成語林 故事ことわざ慣用句』（尾上兼英監修）では、美しい自然の景色。また、美しい自然を味わい、それらを題材とした詩文・書画などをたしなむこと。そういう風流な遊び。類：風流韻事⁹⁾。

『大辞泉』では、①自然の美しい風物。「-を友とする」②風雅な趣を楽しむこと。風流韻事。風流。

以上の辞書から明らかになったことは、「花鳥風月」が、日本の風流の概念であり、自然の美しさを表している。その語源は世阿弥（1363?～1443年?）の『風姿花伝』に最初に登場したといわれている。自然の美しさを鑑賞するだけでなく、それを題材にして詩文・書画を創作すること、またその風雅、風流な遊びという意味合いが含まれている。ここでは、風雅・風流な趣が強調されているように思われる。また『大辞泉』では、「花鳥風月を友とする」という例があり、人ではなく、美しい景色・自然を友にしたい気持ちを表している。「雪月花」の美しい自然を楽しむときに逢いたい人を想う心と違い、また、中国語の「風花雪月」の負の意味合いをもっていないことがわかる。

同じ美しい四季の景色を表している「雪月花」「風花雪月」「花鳥風月」という三つの言葉は、そこから派生した意味合いがそれぞれ違ってくる。日本語の「雪月花」は、美しい自然の景色を見るとき、大切な人を想う心、「花鳥風月」は、その美しい自然を味わい、詩文・書画で表現する風

雅・風流の趣を意味している。中国語の「風花雪月」は、自然の美しい景色を表しているが、あさはかな詩文や生き方を指しているという負の意味合いが含まれている。この微妙な違いは、日本と中国の文化理念の違いからきているかもしれない。日本の文化は、「情」の文化といわれ、「もののあわれ」に代表されるように、自然の景色や文学作品に触れると、心に響いて感動することが多く、またそれを詩文や絵画に表している。中国の文化は「意」の文化といわれ、儒教の影響がつよく、文学が政治的な理念を表現することが多く、風花雪月よりは、もっと重みのある理性的な詩文や地道な生き方を求めるように思われる。

3. 日本人の自然観と文学理念

3-1. 古代日本人の自然観

古代日本人の自然観は、幅が広いが、文献が残されている7, 8世紀の頃、つまり『万葉集』の時代に日本的なものの考え方ができあがったと推測できると、国際日本文化研究センター名誉教授・日本文学研究者の中西進は、「古代人の自然観」という文章のなかで次のように述べた。

「高山と 海こそは 山ながら かくも現しく

海ながら 然真ならめ 人は花物そ うつせみ世人」(『万葉集』巻13・3332)

山は山としてそのまま現実であり、海は海そのものとして真実である。これが山であり、海である。それに対して人間は花のようなものであるといい、それを繰り返してうつせみの世の人間よ、という歌である。この山が山として現実である、海が海として真実であるという断言は、驚くべき深みをもっている。山や海を人間の色に染め上げる以前のものとして、いわば自然そのものとして自然を見ようとする、そういうものがこの自然観の基本にある¹⁰⁾。

中西進によると、自然という言葉は天地自然を表す言葉としては、『万葉集』に出てこない。自然という言葉は、「おのずから」という意味で使われ、天地自然を表すものではない。自然は、中国から借りた言葉である。大野晋は、「自然に該当する日本語はない」といっている。しかし、古代の日本人が自然を認識しなかったことはあり得ない。中西進は、その答えを探して、最後にその言葉は「もの」という大和言葉ではないかと、推測した。そこで、中西進は古代日本人の「もの」について説明したとき、中国の南朝・梁の劉勰（466?～532年）の『文心雕龍』という詩文評書を参考にした。劉勰は南朝梁の文学評論家であり、仏法を修めるかたわら、10巻50編もある『文心雕龍』を著し、中国における最初の総合的・体系的な文学理論書を残し、文学の原理・文体・修辭などを論じた。空海の「文鏡秘府論」は、『文心雕龍』の影響を受けたといわれている。

中西進が次のように説明した。「もの」は、図らずも中国の「物」と対応する。しかし「物」の訳語だと思えない。『文心雕龍』巻の十に「物色」という項目がある。物があってそこに文、あや、飾りであるが、それがある。それを色というのだ、というのである。例えば、「風雖無正色、然亦有声」と、声というあやをもっている。また「四時之動物深矣」、四つの季節がものを動かすことは非常に深いというふうに「物」が出てくるのである。「是以、詩人感物、聯類不窮」、詩人が物に感動して、次々と同類の物を連ねて行って無限であるという¹¹⁾。

こういう物が日本語の「もの」にも対応する。日本語の「もの」は、なかなか深遠な言葉である。まず「もの」は物質的なものを指す。『万葉集』の歌に出ていた高山や海のように存在そのものが、「もの」と言える。万物の神様は大物主という。また鬼という字を「もの」という言葉に当てて書くことがある。この鬼は魂という意味なので、魂を「もの」といったことになる。薬師寺の仏足石歌のなかにこの例がある。「もののけ」という

のも不思議な「もの」の働きをいうのである。すべてのものが霊ある存在としてあって、そこから発せられるなにがしかの不思議なる働き、こういうものが「け」である。そう考えると、「人は花物を うつせみの 世人」というときの「物」も、基本的な存在が「物」であり、その上に「花」という言葉で呼べるような属性をもたせて、それを限定して、それが人間なのだといって、自然と対応させている。言葉を作っていえば、花物の反対は実物とでもいおうか、実ある物といおうか、そういうものが自然だということになる¹²⁾。

中西進は、さらに、その「もの」を自然観、または人間の行為として考えるときに、次の「こと」に発展させたことができると説明した。即ち、日本人は事も言も「こと」といい、「もの」は「こと」に先立つものであり、「もの」の連鎖・重積・集合が「こと」を作る。ところがそのときにはすでに言語によって認識されるはずの状態なので、「こと」(事)はただちに「こと」(言)になる。もちろん「こと」(言)は人間の心が決定した状況を表現したものである。その関係を「もの」の「こと」との出会いと呼びたい¹³⁾と中西進が主張した。そこで、この「もの」の「こと」との出会いに一つの自然の見方が成立する。人間は、言葉と「もの」との出会いのなかから、一つの認識を記述してきた。これは自然観といえるものである¹⁴⁾。続いて中西進は、歌の具体例を挙げてこのややわかりにくい論理を説明した。

「花細し 桜の愛で 如此愛では 早くは愛せず わが愛づる子ら」
(紀 92)

桜の花という「もの」に対して自分の愛する女性を言葉として対応させる。花のような女性というあるイメージが成立する。逆にいうと女性のイメージとして花を対応させる。その時に桜の花に対する見方、自然観の一つができあがってくる。前半の「もの」としての自然が、後半の「人事」

と結合して「こと」を作り上げていく構造は、日本の詩歌の最初の形である。中国の最初の詩集『詩経』の詩も自然と人間を詠んだ¹⁵⁾。

中西進の論理は、次のようにまとめることができる。自然は「もの」といわれ、現実の真実なるものとして認識されていた。それに「こと」(言)を向けることによって、人間の領域に「こと」(事)として導いてくる思考方法があった。それが日本人の最初の自然観である¹⁶⁾。この日本人の自然観は、『万葉集』の時代にできあがり、その後の日本文学、日本の伝統文化に大きな影響を与えている。

3-2. 中世日本人の自然観

国際日本文化研究センター教授・宗教学者の山折哲雄は「中世日本人の自然観」という文章のなかで、宗教信仰の視点から考えて、インドの水の文化に対して、日本の文化は山の文化だと指摘した。縄文文化においては、山を中心とした様々な儀礼のなかで、例えば榊が神木として重視され、神の依り代とされていた。神にささげる木の意味とされていた。仏教が入ってくると、同じ常緑のシキミ(檜)が、儀礼で供えられるようになる。神や仏がそれによって表されているわけで、縄文文化における象徴的な宇宙樹・宇宙軸をなしている。これが生木なのであり、自然の木の姿をそのまま残している。日本の神社の柱も同じで、諏訪神社の四本柱は自然木そのものの、生木の素材感を残そうとしている点では一貫している¹⁷⁾。

この自然観と宗教的な意味合いは、その後日本の茶室でも生かされ、床の間に必ず一本の生木を用いる。禅の修行としての道場である茶室は、神の信仰としての生木を取り入れることによって、神仏習合の意味合いをもつようになったのである。

日本人の中世の自然観について、山折哲雄は曼荼羅を例として挙げ、インド型曼荼羅の影響を受けて作られた日本の曼荼羅が日本人の自然観を表

していると指摘した。また、西行の歌からも、中世日本人の自然観がわかるとっている。

日本人の自然観は、山と海から生まれ、それが「もの」として認識され、「こと」(言)を向けることによって、人間の「こと」(事)として表現している。日本の詩歌の最初の形は、自然と人の出会いによって作り上げたのである。さらに、宗教の視点から考えると、山の文化の影響で、日本人が神木・宇宙樹に対する信仰が深まり、生木を大切な建築などに用いるようになった。そこから展開して、太陽、月、雪、花も文学・芸術のモチーフになってきた。奈良と平安時代は、中国文化の影響で花といえば、梅が多かったが、その後、雪月花は、主に雪・月・桜の取り合わせとして理解され、この三種の景色を愛でる風流な態度そのものを示すこともある。では、次に日本文学における自然について考えてみたい。

3-3. もののあわれ

古代日本人は自然を「もの」として認識し、その自然に触れた時に心に響く感動の「あわれ」がある。「もののあわれ」は、平安時代の文学を捉える上での文学理念と美的理念であった。江戸中期の国学者本居宣長(1730~1801年)は、その最高の達成が『源氏物語』だと主張した。

『広辞苑』(第7版)では、「もののあわれ」(物の哀れ)について、次のように解釈している。①平安時代の文学およびそれを生んだ貴族生活の中心をなす理念。本居宣長が『源氏物語』を通して指摘。「もの」すなわち対象客観と、「あはれ」すなわち感情主観の一致する所に生ずる調和的情趣の世界。優美・繊細・沈静・観照の理念。②人生の機微やはかなさなどに触れた時に感ずる、しみじみとした情趣。「-を解する」

『日本国語大辞典』(精選版)の「ものの哀(あわれ)」の項では、次のように説明している。□物事にふれてひき起こされる感動。多くは「おか

し」「おもそろし」などの知的興味やはなやかさの感覚とは違った、しめやかな感情・情趣についていう。①人の心を、同情をもって十分に理解できること。人情の機微のわかること。また、その人情、愛情など。②物事にふれて起こる、しみじみとした回顧の感慨。③物事や季節などによって起こされる、しみじみとした情趣。折からの観興。④何かに深く感動することのできる感じやすい心。情趣や風流を理解し感じとることのできる情趣的教養。⑤悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさま。日本居宣長が提唱した、平安時代の文芸の美的理念。外界である「もの」と、感情を形成する「あわれ」との一致する所に生ずる調和した情趣の世界を理念化したもの。自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念。その最高の達成が『源氏物語』であると考えた。補注：「あはれ」は、古くは感動詞として、喜怒哀楽のすべてにわたって発せられる言葉だったが、「もの」がつくと、「ものあはれ」「ものあはれ」も「哀」に限定されるようになる。

「ものあわれ」という平安時代の文学と美的理念は、その後の日本文学と藝術に大きな影響を与え、日本文学と藝術の一般理念となり、今日まで通用すると思われる。川端康成は『源氏物語』が日本文学をはじめ、美術工芸、造園まで深く、広く影響を与え、美の糧となり続けたといっただ¹⁸⁾。自然だけではなく、人生・藝術などに触れて生ずる感動、そのしみじみとした調和的な情趣を優美・繊細なものとして感じられるが、漢字の「哀れ」を使うと、哀愁の意味合いが強く感じるように思われる。今中国の若者の間では、この日本的な情趣を「物哀」という漢字で表現し、中国文学にはあまりない、日本文学・藝術の独特な心情として理解されている。中国の文学・文化においては理性や道徳的な「意」がつよく、今、中国の若者が日本の文化に惹かれるポイントの一つはこの「ものあわれ」の情趣と繊細さにあるのかもしれない。

4. 文学における雪月花

4-1. 『万葉集』の雪月花

日本ではじめて雪・月・花を題材にした素朴な歌は『万葉集』に収められた。

『万葉集』は20巻からなる現存最古の歌集で、8世紀後半に成立したとされる。舒明天皇時代(629～641年)から淳和天皇時代の歌(759年)まで、約130年間の長歌・短歌・旋頭歌(せどうか)、仏足石歌体歌・連歌合わせて約4500首、漢文の詩、書翰なども収録され、内容は極めて多彩である。編集は数次にわたるが、最終的に大伴家持(717?～785年)の手を経たものと考えられる。詠み人は天皇、皇族、貴族のみならず一般庶民など幅広い。収められた和歌はすべて「万葉仮名」で書かれているが、漢文で記されているものもある。

『万葉集』巻18詞書大伴家持の「宴席詠雪月梅花一首」がある。

「雪の上に 照れる月夜に 梅の花 折りて贈らむ 愛しき子もがも」
(大伴家持『万葉集』巻18-4134)

雪の上に月が輝く夜 梅の花を手折って 贈るような愛する人がいて欲しいな、という気持ちを表し、月の明るい折に、雪と花を合わせた歌である。これはよく知られている歌であり、雪月花という三文字を使っているが、一つの言葉として使っていない。辞書の「雪月花」の項では引用されていない。

大伴家持のほか、式子内親王(しよくしなにしんのう)(?～1201年)も、雪月花の歌を詠んだ。しかも「雪月花」を一つの言葉として使った。

「いくとせの幾万代か 君が代に 雪月花の ともを待ちみむ」(正治初度百首 式子内親王)

何年も何万年も 君の治世のつづく中で、(わたしたちは)雪月花の友に逢

うのを待とう、という意味の歌である。雪月花のような美しい景色を見るとき、一緒に楽しみ友を待とう。その友は、心のなかの大切な人、あるいはこれからめぐり逢う人かもしれない。これは、白居易の「雪月花の時、最も君を憶ふ」の思いと微妙に違うのかもしれない。白居易は、心のなかの最も親しい人、心の通じる人を思い出して、一緒にこの美しい景色を見たい、という気持ちがつよいように思われる。

この歌では「雪月花」を一つの言葉として用いたが、何故かあまり知られていないし、辞書の「雪月花」の項でも引用されていない。「雪月花」は一つの言葉として意識して使ったり、引用したりする場合、やはり白居易の詩になる。最初の定義の部分でも述べたが、日本の辞書の「雪月花」の説明では、白居易の詩「雪月花の時 最も君を憶ふ」を引用しているし、日本文学・藝術における「雪月花」の意味合いは、やはり白居易の詩から受けた影響が大きく、美しい自然の景色を見るときに、「君を憶ふ」という気持ち・心がつよいと思われる。

4-2. 白居易の「雪月花」

白居易の詩「寄殷協律」の一句「雪月花時最憶君（雪月花の時に最も君を憶ふ）」による「雪月花」は、自然の美しい景色を見るときに、最も親しい友を思い出して一緒に楽しみたい気持ちを表している。

「五歳優遊同過日 一朝消散似浮雲
琴詩酒伴皆拋我 雪月花時最憶君
幾度聽鷄歌白日 亦曾騎馬詠紅裙
吳娘暮雨蕭蕭曲 自別江南更不聞」¹⁹⁾

白居易は中国・中唐の詩人であり、字は樂天、号は香山居士である。殷協律は白居易が江南にいたときの部下であり、この詩は白居易が長安から遠く離れている殷協律に贈ったものである。雪月花の美しいときに、彼を

思い、一緒に楽しみたい気持ちを表している。この詩は、中国ではじめて「雪月花」を題材にしたものだとされるが、中国で出版された『唐詩三百首詳析』（喻守真編注 中華書局1980年版）や『唐詩鑑賞辞典』（上海辞書出版社1983年版）など主な唐詩の辞典には、この詩が入っていない。白居易の詩文集『文集（白氏文集）』は存命中に日本に伝来し、『文選』とともに最も広く読まれ、平安文学に大きな影響を与えて『和漢朗詠集』や『枕草子』に取り上げられた。川端康成はノーベル文学賞受賞式での記念講演に白居易のこの詩を引用した。

4-3. 僧侶の歌における雪月花

川端康成（1899～1972年）は『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』『山の音』などの作品において独自の美的世界を築いた。その日本的な美を虚無的抒情的な筆致で描いた作品が評価され、1968年に文学ノーベル賞を受賞した。川端康成は受賞式での講演『美しい日本の私』のなかで、「もののあわれ」「雪月花」「わび・さび」という日本伝統文化の特質を紹介し、日本人の心を世界に発信した。川端康成の講演は、道元禪師（1200～1253年）「本来ノ面目」と題する歌からはじまる。

「春は花夏ほととぎす秋は月 冬雪さえて冷^{すず}しかりけり」²⁰⁾

道元禪師は、鎌倉初期の禪僧で、日本曹洞宗の開祖である。比叡山で仏法を学び、のち栄西禪師に師事、1223年に宋に入り、如浄より法を受け、27年に帰国し京都の興聖寺を開いて法を弘めた。44年に越前に曹洞禪の専修道場永平寺を開いた。当たり前の四季の景色をありのまま受け止め詠んだ歌であるが、自然と人間が一体になった世界を素直に詠んだ歌である。日本文化論者である栗田勇は『雪月花の心』という著書のなかで、この歌について次のように述べた。「雪月花」の世界に通じている。特に秋の夜空にかかる月は、しばしば仏教の悟りの表すシンボルとして用いられ

る。月が描かれているときは、そこに仏法の真理が象徴されることなのである²¹⁾。川端康成は、道元禅師のこの四季の歌が好きで、講演のなかであわせて四回この歌を引用して説明し、最後に同じ歌で終わらせた。

この歌の後に、川端康成は、月の歌人と呼ばれる明恵上人（1173～1232年）の歌を紹介した。明恵上人は、鎌倉前期の華嚴宗の僧である。華嚴・密教を学び、両者を融合した独自の実践を展開し、のちに^{とがのお}栴尾に高山寺を営み、また栄西が宋から将来した茶樹を栽培した。13世紀に描かれた明恵上人像が有名である。高山寺近くの山中にある大きな松の木が二股に枝分れた所の上で、一人座禅を組んでいる有名な肖像画である。

「雲を出でて我にともなふ冬の月 風や身にしむ雪や冷めたき」²²⁾

元仁元年（1224年）12月12日の夜、天くもり月くらきに花宮殿に入り座禅する明恵上人が、夜中に出観の後、峰の房より下房へ帰る時の歌である。この歌には長く詳しい^{ことばが}詞書きがあり、歌の心を明らかにしている。

「月雲間より出でて、光が雪にかがやく。狼の谷に^ほ吼ゆるも、月を友として、いと恐ろしからず。下房に入りて^{のち}後、また立ち出でたれば、月また曇りにけり。かくしつ^ごつ後夜の鐘の音聞こゆれば、また峰の房へのぼるに、月もまた雲より出でて道を送る。峰にいたりて禅堂に入らんとする時、月また雲を追ひ来て、向ふの峰にかくれんとするよそほひ、人しれず月の我にともなふかと思ゆれば、この歌。」²³⁾

冬の寒い夜に雲から出てきたり、隠れたりする月を友にして夜道を一人て歩く明恵上人の姿が目に浮かぶ歌である。月は良い友である。雲を出る月とは、迷いからさめた心境を表し、深い瞑想を通して自然とのあたたかい共感を体験していたことを詠んだ歌である。

「^{くま}隈もなく澄める心の輝けば 我が光とや月思ふらむ」²⁴⁾

「あかあかやあかあかあかやあかあかや

あかやあかあかあかあかや月」²⁵⁾

ただ感動の声をそのまま連ねる冬の月の歌がある。「歌を詠むとも実に歌とも思はず」(西行の言)の趣で、率直、純真、月に話しかける言葉そのままの三十一文字で、「月を友とする」よりも月に親しく、月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一している。暁前あかつきの暗い禅堂に座って思索する僧の「澄める心」の光りを、有明けの月は月自身の光りと思ふであろう²⁶⁾。

この歌は、月を見る対象としてのみ見ているのではなく、ひたすら月の光そのものになりきっている境地を表しているのである。これが自然と一致した純粹かつ最高の境地として、日本人が好み、かつ尊敬する。月の光そのものになりきって、言葉も出ない。見るものと見られるものとの対立が消え、そこに真実がある²⁷⁾と、栗田勇がいつている。

川端康成が特に明恵上人の「我に伴ふ冬の月」の歌が好きで、よくこれを借りて揮毫する。明恵上人が山の禅堂に入って、宗教、哲学の思索をする心と、月が微妙に相応じ相交はるのを歌って、まことに心やさしい、思いやりの歌とも受け取れると言うのである。雲に入ったり雲を出たりして、禅堂に行き帰りする私の足もとを明るくしてくれる「冬の月」よ、風が身にしみないか、雪が冷たくないか。川端康成はこれを自然、そして人間に対するあたたかく、深い、こまやかな思いやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげている²⁸⁾。

川端康成は明恵上人の「冬の月」の歌を日本人の心の歌として世界にアピールしている。その心とは、人が自然をありのまま受け止め、慎み深く感じとり、自然を友にするあたたかい、繊細な気持ちである。それは日本人の自然観と通じて「もののあわれ」のしみじみと繊細さと一致していると思われる。また仏教の悟りの境地である月のモチーフは、日本文化が禅との深いかわりを語っている。

月の歌の後、川端康成は、古今東西の美術に博識のある矢代幸雄の言葉

を借りて「雪月花」について次のように述べた。「日本美術の特質」の一つを「雪月花の時、最も友を思ふ。」という詩語に約められるとしている。雪の美しいのを見るにつけ、月の美しいのを見るにつけ、つまり四季折々の美に自分が触れ目覚めるとき、美にめぐりあう幸いを得たときには、親しい友が切に思われ、このよろこびを共にしたいと願う。つまり、美の感動が人なつかしい思いやりを強く誘い出すのである。この「友」は、広く「人間」ともとれよう。また「雪・月・花」という四季の移りの折々の美を表わす言葉は、日本においては山川草木、神羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を表わす言葉とするのが伝統なのである。日本の茶道も、「雪月花の時、最も友を思ふ」のがその根本の心で、茶会はその「感会」、よいときによい友たちが集うよい会なのである²⁹⁾。

ここでは、川端康成は日本美術だけではなく、日本の伝統文化全般にわたって、四季折々の美に触れたときに、その感動を親しい友と一緒に分かち合いたい思いやりがあるといっているのである。これは白居易の「雪月花の時に、最も君を憶ふ」という詩から引用したが、興味深いのは、「君を憶ふ」の表現を「友を思ふ」に変えたところである。川端康成の解釈では、「君」という決まった個人ではなく、その対象はもっと広い範囲の「友」になり、さらに「人間」全体まで含めた。また「雪月花」の意味合いを自然のすべて、そして人間の感情まで含めての美まで広めた。つまり、人間と人間、人間と自然が一体になって感動しあい、分かち合うあたたかい、思いやりが満ちた理想的な世界である。これは、今日の私たちが忘れた、あるいは忘れかけている大切な心であろう。川端康成は、講演の最後は、もう一度道元禅師の四季の歌に触れ、「四季の美を歌ひながら、実は強く禅に通じたものでせう」³⁰⁾と、「雪月花」の美意識は、禅の心に通じることを強調した。「一輪の花は百輪のよりも花やかさを思わせる」³¹⁾のである。

雪月花を語るときに、西行法師の歌が欠かせない。西行（1118～1190年）は、平安末期の歌僧である。23歳のとき、無常を感じて僧になり、高野山草庵に住み、晩年は伊勢を本拠に陸奥・四国にも旅して自然と心境とを詠み、独自の詠風を築いた。『新古今集』には94首の最多歌数を入集させている。西行は桜の詩人と呼ばれるが、月の歌もある。

山折哲雄は「中世日本人の自然観——仏教を中心に」という文章のなかで、西行の月の歌について次のように論じた。『万葉集』以来、日本の歌人たちは「山の端にかかる月」を詠み、そこには日本人の自然観、美意識を現している。西行の歌はその典型的な例である。西行の歌に、「観心をよみ侍りける」という詞書のついた一首がある。観心とは密教の観法で、自分の心を観るのである。密教の瞑想法の一つに月輪観がある。大日如来と近づく瞑想法であり、それによって即身成仏が実現すると考える。西行はおそらく高野山での修行時代にこの月輪観をやっていた。自分の心を観る——そういう観法をやっているときに自然に詠んだ歌であろう。また、次のような月の歌もある。

「闇はれてころのそらにすむ月は西の山べやちかくなるらん」

月を見て座っていると、その月が空に移動して西の山の方に近づいていく。それを見ているうちに自分の心の闇も晴れて、月と一緒に重なって見えてくる。瞑想によって清らかになった自分の心が、月と一緒に西の山の端に近づいていく。そのような心の動きや感覚を歌っている。

「山の端に隠る月をながむればわれもこころの西にいるかな」

明け方に月が山の端に沈んでいく。自分の心も自然に月と一緒に西の方に入っていきうようと、歌っている。西方浄土を願う西行の気持ちを表している。密教的な感覚と浄土教の感覚が混じりあっている。そこには中世日本人の自然観が鮮明に映し出されていると、山折哲雄が解釈した³²⁾。

西行の月の歌からわかるように、日本人の自然観は仏教と密接な関係が

あり、特に月は西方浄土のイメージがあり、僧侶が瞑想を通して月と一体になり、西方浄土に惹かれる心をつよく表しているのである。

西行法師は桜の花の下で死を願った。彼は次のような美しい歌を詠んで、自分の死を予言した。

「願わくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月の頃」³³⁾

栗田勇は、西行法師のこの歌と死について、次のように述べた。華やかで、あたかも自然への回帰をよろこび、永生を信じているかのようである。そしてその予言とおり、釈迦涅槃の記念日に合わせるように、西行法師はこの世を去ったのである³⁴⁾。西行法師は桜の下で眠り込んで心が憧れの西方浄土に逝ったのであろう。

4-4. 梅の花

令和の年号は梅の花と深くかわりがあり、『万葉集』にある「初春令月、気淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香」の歌からとってきたのである。

「令和」の年号の引用元は、『万葉集』の「梅花（うめのはな）の歌」32首の序文である。原文は、次のように漢文で書かれた。

「天平二年正月十三日 萃于師老之宅、申宴会成、于時、初春令月、気淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香

（天平二年正月十三日 師の老の宅に萃まりて宴会を申く。時に初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす）」

天平2年（730年）の正月、大伴旅人（665～731年）が開いた梅花の宴の情景を記したものである。32人がこの会に参加し、それぞれ梅の花にまつわる和歌を詠んだ。宴会を催した旅人は、『万葉集』の編集者の一人とされる大伴家持の父親である。初春のよき月に、さわやかな空気の中、

風が優しく吹いている。梅の花はまるで白粉のように美しい。

この序文について、岩波文庫編集部は2019年4月1日のTwitterで次のように紹介している。

「『令和』の出典は、『万葉集』の「梅花の歌32首」の序であり、この序は大伴旅人が作ったとされています。「あたかも初春のよき月、気は麗らかにして風は穏やかだ。」(『万葉集(二)』)。」

岩波文庫編集部は、『万葉集』と『文選』の原本の写しを付けて引用し、この「初春の令月、気淑しく風和らぐ」は、中国の古典『文選』の句を踏まえていることが、新日本古典文学大系『萬葉集(一)』の補注に指摘されていると紹介した。

「令月」は「仲春令月、時和気清」(「仲春冷月、時和し気清らかなり」)、後漢・張衡『帰田賦・文選巻十五』とある³⁵⁾。

これによると、中国の詩文集『文選』に収録されている詩、後漢(25～220年)の科学者・文学者張衡(78～139年)の「帰田賦」の一部を踏まえているということである。

『文選』は、中国の周から梁にいたる千年間の代表的文学作品760編を37のジャンルに分けて収録した中国最初の詩文集である。6世紀前半に成立した。体裁別・年代順に収録し、30巻であったが、のち唐の李善が注を付けて60巻とした。六朝梁の武帝蕭衍の長子・昭明太子(蕭統501～531年)が、正統文学の優れたものを集大成することを意図して、文人の協力のもとに編集し、中国古代文学の主要資料として後世に残し、知識人の必読書とされていた。

日本には、天平以前に『文選』が渡来した。奈良・平安期の貴族にとって、漢文の素養は必須とされ、特に『文選』は基礎教養とされた。『枕草子』では「書は文集、文選」、『徒然草』では「文は文選のあはれなる巻々、白氏文集」と記され、白居易の詩文集と並び称され、愛読された。どちら

も平安文学に大きな影響を及ぼした。元号の典拠としても、『文選』は過去25回登場している。

「初春令月，氣淑風和」（『万葉集』）と「仲春令月，時和氣清」（『文選』）の詩は、表現が異なるが、どちらも「令」と「和」を用いて、春よき月のさわやかで、和やかな雰囲気表現している。『文選』にルールをもつ言葉であると同時に、『万葉集』ならではの独自の言葉の組み合わせになっている。

「令和」の年号が発表されてから、日本と中国では、この言葉の典拠について様々な議論があった。令和の時代だからこそ、議論を超えて、人間の本来の心の望みは何かをもっと極めていけば平和が訪れるであろう。国は異なるが、古の時代に生きる人々は「漢字」という同じ文字を用いて、恋の喜びや別れの悲しみ、自然の美しさを紡いできた。

『万葉集』で詠まれている梅の花は、奈良から平安時代にかけて、花といえば「梅」であった。令和になってから人々の心のなかで蘇って、太宰府の梅は、今まで以上に人を魅了している。

一方、中国では、梅の花は国を代表する花として愛されている。歌人中根三枝子が著した『万葉の贈る花・伝える歌の本』によると、梅は中国原産の落葉高木で、日本には西暦700年以前にも伝来したものと思われる。現在では鑑賞用として、また果実を食用とするため広く各地で栽培されている。早春に咲く梅は、香しい花であり、色は白が多いが、淡紅色、紅色、また一重咲き、八重咲きのものがあり、園芸品種は300種以上もある。『万葉集』のなかに、「うめ」とみえる歌は119首ある。万葉の時代、「うめ」は中国渡来の花として珍しがられ、特に、当時の貴族階級や文化人にもてはやされた。天平2年（730年）正月に太宰府の相伴旅人邸で催された梅花の宴には、山上憶良をはじめ筑紫の国司や太宰府の職員たちが集まり、主客あわせて32人、庭の梅を題材に歌一首ずつを詠みあった。こう

した大勢の文人が集まって詩歌を作ることは、漢詩の世界ではよくあるが、大和歌の分野では、この太宰府の梅花の宴は、最も早いもので、画期的な催しであった³⁶⁾。

「吾が苑わそのに梅の花散るひさかたあめの天より雪の流れ来るくかも」

吾が苑に梅の花が散る。いや、まてよ、大空より雪が流れてくるのであろうか。

この歌は太宰府梅花の宴の主人・大伴旅人の作である。旅人は大伴安麻呂（～714年）の子で、家持の父である。神亀3年（726年頃）、太宰師として筑紫に下り、山上憶良（660～733年）と交わり、中国文化に心酔し、老荘思想の影響がみられる。

この歌のように、梅の花かな雪かな、とまがう歌は他にもあって、これらはみな白梅であることがわかる。『万葉集』のなかに紅梅とみられる歌は一首もない。紅梅が現れるのは平安時代に入ってからで、紀貫之（～945年）の歌に紅梅が出てくる。

「雪とのみあやまたれつつ梅の花くれなゐにさへかよひけるかな」

また『枕草子』に「木の花は濃きも薄きも紅梅」とある³⁷⁾。

奈良時代に白梅が伝来し、万葉歌人に愛され、詠まれた。平安時代に入ってから紅梅も歌に表れて、歌人の心情の変化がみられ、大陸文化の影響が強くなったように思われる。中国では白梅と比べて、紅梅のほうがもっと明るく感じられ愛されている。紅梅を賛美する歌は今日でも人々に元気を与え、よく歌われる。現代中国でも「紅梅賛」という歌があり、いつも歌われている。

5. 藝術における雪月花

西欧の藝術は人間を中心として描かれるが、日本の場合、王朝時代の平安宮廷から武家時代といわれる鎌倉、室町、桃山時代を経て、近世の江戸

時代にかけて表現の方法や手段は変化してきたが、一貫しているものは主として自然の風景としての雪月花である。また日本の仏教芸術は、曼荼羅を例にするとインドの仏と菩薩が描かれた曼荼羅と異なり、仏と菩薩のほかに自然風景も取り入れている。

5-1. 曼荼羅

曼荼羅は密教とともにインドから中国に伝わり、また空海（774～835年）によって日本に伝わってきた。日本式の曼荼羅はインドの曼荼羅とかなり異なる。そこから日本人の自然観がみられる。山折哲雄が「中世日本人の自然観」という文章のなかで論述した日本の曼荼羅の特徴を簡単にまとめてみる。

インドの曼荼羅は密教思想と宇宙観の現れであり、諸仏と諸菩薩が描かれ、中心が一元的と多元的な曼荼羅がある。そこには自然が表現されていない。しかし、日本式曼荼羅は正統の密教の影響を受けつつも、それとは別種の空間感覚によって自然と様々の世界、仏、菩薩と自然を統合する世界を表現するようになる。典型的なのは春日大社にある春日曼荼羅である。三つの部分から構成され、上部は春日連山、その山に月がかかっている。中段部分は、樹林に囲まれた春日大社であり、この土地の最古の神様も描かれている。最後の下段には興福寺の堂塔伽藍が描かれている。中段が神の領域、下段が仏の領域を示している。その二つの領域を統合するものとしての上段の山の世界が配置された。山の端にかかる輪円の世界は、その二つの世界を統合する舞台として意識されている。神仏習合の関係を示している。山は宇宙の中心として描出されているのである。ここに自然が出てくる。その自然は山、樹木、花になっている。日本型曼荼羅の特色は自然が見えてくることであり、密教曼荼羅とは対照的である³⁸⁾。

日本の曼荼羅は、インドの曼荼羅と異なり、山、月、樹木、花も取り入

れ、いかにも自然を大切にしていることがわかる。雪月花の世界の心が現れているのである。

5-2. 絵 画

1) 酒井抱一の雪月花図

江戸時代後期の画家酒井抱一（1761～1828年）は、仏門に入ったが、すぐに隠退し、書画俳諧に風流三昧の生活を送った。絵は、はじめ狩野派、沈南蘋派、浮世絵などを学んだが、のち光琳に傾倒し、光琳をもとにして独自の画風を開いた。代表作は「夏秋草図屏風」であるが、「雪月花図」絹本著色三幅も残した。江戸時代文政三年（1820年）の作品であり、落款は「抱一筆」「抱一暉眞筆」になっている。春の桜、夏秋の月と冬の雪松を描く雪月花は、移りゆく日本の季節を物語っている。三幅を並置した時の各幅の相互画面構成を考慮し、雪松は画面の上部に、雲居の月は中央に、桜花は下部に描かれている。画家、俳人、琳派藝術の研究家でもあった抱一のデザイナーとしての面目が躍如としている³⁹⁾。

2) 東山魁夷の雪月花

日本の画家東山魁夷（1908～1999年）は詩情あふれる装飾的風景画を描き、清楚なロマン的作風で知られる。『東山魁夷 雪月花』というポストカードブックの序文「花と月と雪」で次のように述べている。長くないので、東山魁夷が作品を作るときの心の鼓動を共有するために、全文を引用しておく。

「だいぶ前のことですが、私しだれ桜の満開と、春宵の満月とが互いに呼び合う情景を描きたいと考えました。それで私はその夜が満月であることを確かめてから、京都へ向かったのです。昼間、洛北で写生をしていた私は、頃合いを見定めて円山公園へと急ぎました。間もなく山の頂きが明るくなって、丸い月が紫がかって宵空を背景に昇り

はじめました。

花はいま月を見上げ月も花を見えています。この瞬間、周囲の雑路は何も眼に入らず、ただ、月と花だけの清麗な天地に身を置いている自分に気づきました。

これを巡り合いと言うのでしょうか。花の盛りは短く、また満月と出会うのはなかなか難しいことです。

風景との巡り合いは、いつの時もただ一度と思わなければならないのです。自然と共に生きていて常に変化してゆくからです。

こうして、私達を取り巻く自然は、いつもさまざまな姿を見せてくれますが、私が特に好きなのは、一夜にして夢幻の世界を作り上げる雪の訪れです。霧氷の美しさは格別で、透明な氷となって細い枝に堅く凍りついた場合、風が吹くと、互いに触れ合って澄んだ響きを立てます。

ずっと以前、信州側から雪の乗鞍越えをして飛騨側へ降りたことがあります。晴天の快い登りの途中で、白くどこまでも続く霧氷の樹林の中から、その神秘的な音色が聞こえたのです。

さらさらと水晶の数珠をくるような音をたてて、ゆらいでいる
樹々の梢こずえ

と、私はその時の紀行文に記しましたが、時を経るにつれて、そのかすかな響きはますます清澄さが加わり、私の記憶の中に強く残りました。

この時の印象が基になって描いたのが日展に出品した「冬華」です。それはあの雪山で聞こえた霧氷の響きから生まれました。

今回、日本人が古来から好む雪・月・花に因む作品を選んでまとめました。そこにはやはり日本人共有の想いが籠められているのではないのでしょうか。』⁴⁰⁾

『東山魁夷 雪月花』ポストカードブックには、花・月・雪をモチーフにした絵をそれぞれ六枚が入っている。画家が自然に魅了され、自然に近づき、自然と一体になって心で描いた感動をしみじみと伝わってくる。穏やかな情趣、純潔な詩情の感じられる作品は高く評価され、多くの美術館に所蔵されている。東山魁夷の風景画から日本文化の根底にある「雪月花」の心と日本人固有の美意識が窺われる。

6. むすびにかえて

中国の詩人白居易の「雪月花の時、最も君を憶ふ」という詩が平安時代に日本に伝わり、『和漢朗詠集』や『枕草子』に載り、日本の伝統文化と文学・藝術に大きな影響を与えた。しかし、白居易の詩の前に、『万葉集』のなかでも雪月花の歌があったが、ただ、「最も君を憶ふ」のようなつよく古い友を思い、美しい自然の景色と一緒に楽しみたいという気持ちは表していない。川端康成は『美しい日本の私』という講演のなかで、「雪月花の時、最も友を思ふ」というように使い、「友」の範囲を広めて、人間・自然と美しい自然を見るときに人間の心まで含めた「友」にした。実に素晴らしい解釈である。「雪月花」を愛する心は「わび・さび」と同じく、禅の心に通じている。物質文明が中心になっている時代に、人間が心の感動を忘れてるように思われる。現代人は疲れた心を癒す必要があるのかもしれない。

松村宗喜先生は『そこに心があるならば』の「心しずかに」という節では、次のような話を書いた。すがすがしい夏の休日、山に遊びに行った時、「仏の姿は如何に」との問いに、宋代の詩人蘇東坡が「溪声長広舌 山色清淨身」と答えたことを思い出した。谷川の清い流れの音が仏の声であり、山の相がそのますがたま仏の姿であると感動した。仏のような山は、心の疲れも癒し、心が病まないように心がけるべきだと仰る。「その妙薬は平

和であり、人それぞれには、趣味の音楽や絵画であったり、親しい友人との語りであったり、旅先の花や鳥であったり、いろいろでしょうが、あらゆる方法でこの短い人生を共にしてくれる“我が心”を大切にしようではありませんか。」⁴¹⁾

続いて「平和に心して」では、若い世代に大切なメッセージを残した。

「お若い方々にもぜひわかっていただきたいのは、この平和はたいへん大きな犠牲の上に得たものなのだとうことです。国同士、人同士、許しにくい事柄を許し合って手に入れた平和です。それを思う時、世界中に通用するところの、人の心を温かくするものを、私たちはお茶によって作り出したいと、心をあらたにせずにはいられません。」⁴²⁾

松村先生の願いとその心を受け継いで、若い世代に伝えていきたい。

松村宗喜先生は『そこに心があるならば』の「女心か桜花」の一節で女性の人生と桜について次のように書いた。

「桜の花に、私はむしろ女を感じます。歳の頃なら七つ八つといたい初咲きも可憐なら、咲きも劣らず散りもはじめぬ満開の誇らしさにも気品があり、ちょっとおくでの八重桜などとくに妖艶で、女盛りに歳はないといたいところです。が、花に嵐がつきもので、かならず冷たい雨にうたれながら、そこはかたなく散りはじめる哀しさは、女の一生を思わせませす。それでも、地面に散り敷く花びらには、一つの色あせたところもなくさらに美しいので、有名な『娘道成寺』の踊りでは、花びらを集めて毬にして、手毬をつく振りがあるのでしょう。」⁴³⁾

「芸がまったなしなら桜もまったなしで、春の一回だけ幕をあけます。年月をかけて貯えてきた修練の成果と情熱を、唯一度の機会を得て、その一時に発散しつつ、そして桜が散って曲も終われば、あとに何も残るものはありません。ただ心にしか残らないからこそ、なおさら

豪華なのでしょう。]⁴⁴⁾

今この文章を読むと、まさに松村先生の生涯がそのまま映し出されるとつくづく感じる。人生は花と同じように終わりがある。精一杯生きて綺麗に咲いてその豪華さを残すような生涯が羨ましい。あわただし時代を生き抜くために、花を愛する心を忘れずに、花のように生きるよう日々精進していきたいものである。

道成寺の桜は、謡曲、能、歌舞伎の演目として知られている。

「桜々と謡われて 言うて袂の分け二つ……

露を含みし桜花 さわらば落ん風情なり……」⁴⁵⁾

桜はやはり日本の風土にあってどこかわびの心に通じるところがあるように思われる。満開の美しい桜は人々を魅了するが、風と雨のなかで散ってしまうときも輪廻を感じさせるような可憐さと力強さがあるように思われる。

中国では、桜を楽しみたい人も増えているが、空いっばいに咲いているピンクの雲のような満開の桜が好きで、どちらかという、華やかで生命力を感じさせるような梅のほうが愛されているのかもしれない。しかし、花を愛する心に国境がなく、皆同じである。自然とともに美しく生きていくために平和な世界を守る努力が必要である。

「雪月花の時に、最も君を憶ふ」

2019年末から2020年にかけて、世界的に新型コロナウイルスが蔓延し、人間世界に計り知れない打撃を与えた。自然のなかで生かされている人類にとって、もう一度原点に戻り、謙虚に自然と人間、人間と人間の間関係を考え直さなければならない時期が来ていると思われる。自然を愛し、すべての生命を愛し、雪月花の美しさを感じる心を忘れないようにしたい。

2020年3月末、この美しい桜が満開の季節に思いもよらず、東京には雪が降った。一期一会のめぐり逢い、淡いピンク色の桜の花に白い雪がか

かって幻の美しさを楽しめた。松村先生をお見送りしてもう一年の歳月が流れた。花を愛で、自然を大切に、心を豊かに一碗の茶をもって世の中に平和と平安がもたらされるよう切に願いたい。

注

- 1) 岡倉天心著 桶谷秀昭訳『茶の本』講談社、2000年版、77-78頁。
- 2) 松村喜代子『そこに心あるならば』栄光出版社、2014年、86頁。
- 3) 同書、35頁。
- 4) 同書、35頁。
- 5) 『辞海』（縮印本）上海辞書出版社、1989年、1727-1728頁。
- 6) 『現代漢語詞典』商務印書館、1995年、328頁。
- 7) 和泉新・佐藤保編『中国故事成語大辞典』東京堂出版、1992年、1029頁。
- 8) <https://ja.wikipedia.org/wiki/風花雪月>（2019年2月12日アクセス）。
- 9) 尾上兼英監修『成語林 故事ことわざ慣用語』旺文社、1993年、221頁。
- 10) 中西進「古代人の自然観」伊藤俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社、1995年、103頁参照。
- 11) 同書、104-105頁参照。
- 12) 同書、105頁参照。
- 13) 同書、107頁参照。
- 14) 同書、107頁参照。
- 15) 同書、107-108頁参照。
- 16) 同書、103頁参照。
- 17) 山折哲夫「中世日本人の自然観」伊藤俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社、1995年、187頁。
- 18) 川端康成『美しい日本の私』講談社、2006年版、31頁。
- 19) <https://zh.wikisource.org/wiki/寄殷協律>（2019年2月12日アクセス）。
- 20) 同上、6頁。
- 21) 栗田勇『雪月花の心』祥伝社、2008年、44頁参照。
- 22) 川端康成『美しい日本の私』講談社、2006年版、6頁。
- 23) 同上、7頁参照。
- 24) 同上、8頁。
- 25) 同上、9頁。

- 26) 同上, 9頁参照。
- 27) 栗田勇『雪月花の心』祥伝社, 2008年, 48-50頁参照。
- 28) 川端康成『美しい日本の私』講談社, 2006年版, 10頁参照。
- 29) 同上, 11-12頁参照。
- 30) 同上, 36頁。
- 31) 同上, 26頁。
- 32) 山折哲雄「中世日本人の自然観」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社, 1995年, 197-200頁参照。
- 33) 久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波文庫, 2017年版, 20頁。
- 34) 栗田勇『雪月花の心』祥伝社, 2008年, 52頁参照。
- 35) <https://twitter.com/iwabun1927>
<https://www.buzzfeed.com/jp/keiyoshikawa/reiwa-mouzen-manyou>
(2019年5月1日アクセス)。
- 36) 中根三枝子『万葉の贈る花・伝える歌の本』【木の花編】白墨社, 1996年, 27頁参照。
- 37) 同書, 26-27頁参照。
- 38) 山折哲雄「中世日本人の自然観」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社, 1995年, 188-194頁参照。
- 39) <https://blogs.yahoo.co.jp/hehualu2000jp/28950603.html>
(2019年3月2日アクセス)。
- 40) 東山魁夷『東山魁夷 雪月花』日経ポストカードブック 日本経済新聞社, 1999年版。
- 41) 松村喜代子『そこに心あるならば』栄光出版社, 2014年, 58頁。
- 42) 同書, 59頁。
- 43) 同書, 31-32頁。
- 44) 同書, 32頁。
- 45) 同書, 34頁。

参 考 文 献

- 岡倉天心著 桶谷秀昭訳『茶の本』講談社, 2000年版
尾上兼英監修『成語林 故事ことわざ慣用句』旺文社, 1993年
川端康成『美しい日本の私』講談社, 2006年版
栗田勇『雪月花の心』祥伝社, 2008年
久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波文庫, 2017年版

『広辞苑』（第7版）

中西進「古代人の自然観」伊藤俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社，1995年

中根三枝子『万葉の贈る花・伝える歌の本』【木の花編】白墨社，1996年

『日本国語大辞典』（精選版）

東山魁夷『東山魁夷 雪月花』日経ポストカードブック 日本経済新聞社，1999年版

松村喜代子『そこに心あるならば』栄光出版社，2014年

山折哲夫「中世日本人の自然観」伊藤俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社，1995年

和泉新・佐藤保編『中国故事成語大辞典』東京堂出版，1992年

『辞海』（縮印本）上海辞書出版社，1989年

『現代漢語詞典』商務印書館，1995年

<https://ja.wikipedia.org/wiki/風花雪月>

<https://zh.wikisource.org/wiki/寄殷協律>

<https://twitter.com/iwabun1927>

<https://www.buzzfeed.com/jp/keiyoshikawa/reiwa-mouzen-manyou>

<https://blogs.yahoo.co.jp/hehualu2000jp/28950603.html>